

## 鑑賞学実践研究10

### —ミケランジェロ作およびベルニーニ作の《ダヴィデ》—

吉 川 登・緒 方 信 行\*

#### Case Studies in the Science of Appreciation of Art 10

#### —Michelangelo's and Bernini's Davids—

Noboru YOSHIKAWA and Nobuyuki OGATA

#### Abstract

This study seeks to find an effective form of appreciation of art in the junior high school. In this study, we focus on the process of "knowing" and "thinking" in the act of appreciation of art, because the phase of "seeing" must have been fully trained in the primary school and the process of "knowing" is more important in the junior high school owing to their mental growth. Thus, the lesson practiced for this study is constructed under the basic principle centered on the process of art appreciation from "knowing" to "thinking"

In addition, we introduce some knowledge of the established methods of interpretation of art to the process of "knowing"; that is to say, the knowledge of "style" as a method of art interpretation is included in this study and Michelangelo's "David" and Bernini's "David" are selected as two works for art appreciation from the standpoint considering the change of styles not only in individuals but also in eras.

**Key Words :** the process of art appreciation, from "knowing" to "thinking", the change of styles, Michelangelo, Bernini, "David"

#### 1 はじめに

鑑賞学が設定する「見る」「知る」「考える」の鑑賞行為の過程において、小学校における鑑賞授業が「見る」を中心構成されるのに対して、中学校における鑑賞授業は「知る」を中心構成される。小学校での鑑賞行為の基本路線は、「見る」から「考える」であったが、中学校ではそれは、「知る」から「考える」へと軸足を移すことになる(注1)。

だが、あくまで、これは、小学校で「見る」訓練が十分行われたということを前提にしていることである。小学校において「見る」訓練が十分ではない場合は、中学校においても、「見る」に十分時間を割かねばならない。

問題は、知識の質である。むやみに知識を与える鑑賞授業は、単なる解説に終わってしまう傾向がある。鑑賞の本質は、鑑賞者の能動的な鑑賞行為を展

開させるということにある。したがって、鑑賞者は知識を蓄積するだけではなく、知識を運用して、「考える」が出来なければならない。

美術研究の長い歴史において、古典的とも言える多様な方法論が開発されてきたが、それらの方法的知を、「知る」の過程の中に組み込むことによって、中学校における鑑賞授業の背骨が形成されることであろう。

本実践では、そうした方法的知の中で、最も代表的な「様式論」という視点を設定し、これまた西洋美術において最も代表的な二つのダヴィデ像—ミケランジェロとベルニーニの作品—を鑑賞するという授業を行う。

以上のように、本鑑賞学実践研究授業のポイントは、(1)鑑賞行為「見る」「知る」「考える」を適切に配分する(2)中学校の鑑賞では、「知る」から「考える」へ、という流れを重視する(3)「知る」過程に、美術作品解釈の方法論(本実践では「様式論」)に関する知見を導入する、ということになる。

\* 熊本大学教育学部附属中学校教諭

## 2 授業実践「2つのダヴィデ像」

題材名；「2つのダヴィデ像」

日時；平成16年7月12日（月） 第2校時

場所；熊本大学教育学部 附属中学校 美術室

学級；1年2組（男子19名，女子20名，計39名）

中学校になってからの鑑賞の授業は2回目である（1回目は美術展鑑賞）。生徒たちの小学校における鑑賞学習経験は，各地から入学してきているという本校の特徴上，まちまちであり，ほとんど経験のない生徒もいる。すなわち，生徒たちにとっては今回が本格的な鑑賞学習と呼べる第1回目の学習といえる。

本実践では，有名なミケランジェロのダヴィデ像とベルニーニのダヴィデ像を鑑賞課題作品とし，両作品を比較対照したうえで，様式論に注目しながら鑑賞授業を進めていく。

なお，これから掲載する生徒の意見・感想等は，授業中の生徒の発言や「学習シート」に記されていたことを集約したものである。

### (1) 鑑賞課題作品および授業の概略・準備

ミケランジェロの《ダヴィデ》（フィレンツェ，アカデミア美術館）は，1501～04年に制作され，ルネサンス様式を代表する彫刻作品である。一方，ベルニーニの《ダヴィデ》（ローマ，ボルゲーゼ美術館）は，1623年に制作された作品で，バロック様式を代表する。本題材はこの時代を隔てた2人の彫刻家の2つのダヴィデ像について様式論の観点から検討していく比較鑑賞型の教材である。

まずは，作家と時代が違う2つのダヴィデ像を生徒に提示することから始まる。…「見る」

次いで，2作品の違いからスタイルの存在に気づかせて様式論を説明し，ミケランジェロとベルニーニの他の作品およびルネサンス時代とバロック時代の作品群について分類分けさせて，2作家の作品や2時代の作風そして様式論そのものへの理解を図る。…「知る」

このような知識の獲得をとおして，最終的に改めて2作品について検討させ意見を求める。…「考える」

以上，鑑賞過程「見る」「知る」「考える」に基づいて展開していくが，本題材の特徴は，様式論の下に実際に作品を分類するという，知識の確実な理解への処方を含んでいることである。分類という手段による様式論の把握のもと，生徒は授業開始時とは全く違った目と心で2作品を見つめるようになる。

授業の準備としては，次のようなものが要であ

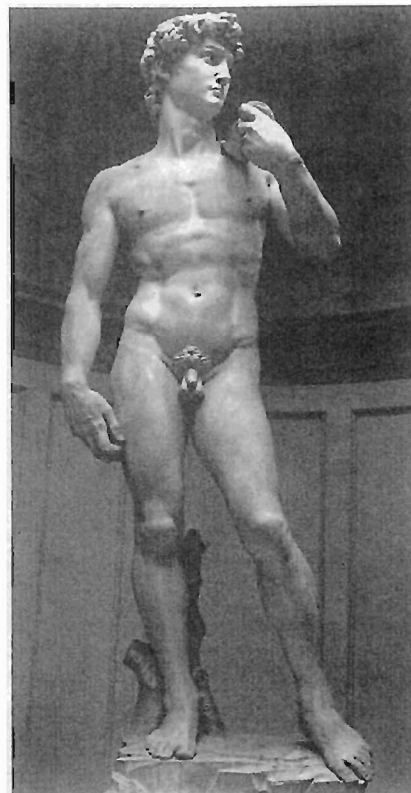


図1 ミケランジェロ《ダヴィデ》



図2 ベルニーニ《ダヴィデ》

る。①鑑賞課題作品（2つのダヴィデ像の写真）②学習シート（ワークシート：生徒が意見等を記入する）③解説シート（生徒に与えられるべき知識を簡

潔に記載したもの) ④作品シートA (《ダヴィデ》以外のミケランジェロとベルニーニの作品の写真を数点ずつ貼り付けたもの：個人様式の違いを学習するための資料) ⑤作品シートB (ルネサンスとバロックの様式を顕著に示す作品を、絵画・彫刻・建築から選んで、その写真を貼り付けたもの：時代様式の違いを学習するための資料) ⑥板書計画 (授業を分かりやすくかつインパクトのあるやり方で進行させるための手立ての一つ：拡大写真を貼る等)

読書日 平成 年 月 日






鑑賞『二つの』ワークシート

年 組 号 氏 名

1 比較しましょう！









A) 作品	B) 作品
特徴	特徴
感想	感想

2 A の作品はどれ？ (残りは B の作品)

イ      ロ      ハ      ニ      ホ      ヘ

3 時代の作品はどれ？ (残りは 時代の作品)

ト      チ      リ      ヌ      ル      ラ      ワ      カ

4 最終判定 …自分の考えを書いて下さい。(様式論を学習したことをもとに)

A) の作品について	B) の作品について

図3 学習シート

## (2) 授業の実際

以下、「見る」「知る」「考える」という鑑賞行為を軸にして展開した授業の実際を、「発問」「説明」「指示」をもとに記す。「発問」「説明」「指示」に関連した鑑賞行為「見る」「知る」「考える」の配分についても、同時に記す。

**発問1** この像、知っていますよね？どう思いますか、いろいろ思ったことを言ってみよう。…「見る」

作品は一点ずつ紹介することにして、まず、ミケランジェロのダヴィデ像について自由な意見、感想を発表させた。題名、作者名なども聞いた。

**発問2** 2つ目の作品です。この像はどうでしょ

う？先ほどと同じように思ったことを言ってみよう。…「見る」

2つ目の作品、ベルニーニの像についても自由な意見、感想を発表させた。題名、作者名なども聞いたが、作品について知っている生徒は皆無であった。

**説明1** 2つの作品は、実は同じテーマ、ダヴィデ像です。ダヴィデについて説明します。…「知る」

同じテーマ、題名であることを知らせた後、テーマの「ダヴィデ」について次のように紹介した。

《ダヴィデ》とは；ダヴィデは「旧約聖書」に出てくるユダヤの英雄である。非力な少年ダヴィデは、神の奇跡の力に助けられ、投石器によって敵のペリシテ人の巨人ゴリアテを倒す。美術表現においてダヴィデは投石器、剣、ゴリアテの首などとともに描かれることが多い。

**指示1** それぞれの像の特徴と感想を「学習シート」に書いてください。…「考える」

違いは箇条書きで良いとした。裸と着衣、単純と複雑、すんなりとひねり…など、感想は大まかな自分の感じたこと程度で構わないとし、記入させた後、発表させた。

以下、「学習シート」への記録を2作者対比の形で紹介する。

特徴 (ミケランジェロのダヴィデ像/ベルニーニのダヴィデ像)；①裸である/布をまとっている。②左手に何かを持っている/両手に何かを持っている。③何かをぼんやり見ている/何かをねらっている。④スラリとした体形である/がっちりした体形である。⑤リアルでとても人間に似ている/リアルでとても人間に似ている。⑥無表情/表情がある。⑦裸足である/裸足である。⑧やさしい顔/いかめしい顔。⑨正確につくってある/髪の毛から足まで細かくつくってある。

感想；①開放感のある感じがした/今にも動きそうな感じがした。②弱そう/強そう。③自由な感じを表しているような感じ/何かをしようとしているような感じ。④筋肉や関節等の体のでこぼこしている部分までつくってある/さらに筋肉があり、動く寸前をモデルにしているような姿勢。⑤そのままの肉体を芸術的につくっている/そのままの姿をつくっていない。⑥遠くから戦いをながめている感じ/いかにも戦場にいます！という感じ。⑦気持ちが悪いと思ったけれど、これが「美」というのかなと思った/怒っている人のかたどっている。動きがある。⑧細かいところまでつくってあって、人の体をていねいに表していると思う/体を曲げているので本当に動いている感じがする。⑨どうして裸で立ってい

るのかと不思議に思った。また、左手には何を持っているのかも疑問に思った／こちらはミケランジェロの作品と違ってしっかりと立っているのではなく、体をねじっているような感じだった。また、2つの作品とも同じ方向を見ているのは何を見ているのかも疑問に思った。⑩テレビのCMであまりいい印象を持っていない／何か悪いことを考えている。

発問3 同じテーマなのに、なぜこのように違うのでしょうか。…「考える」

作者が違うから、時代が違うからなどの生徒の声が出た。様式論に結びつけるための発問であったが、様式論について、口頭では以下のように紹介した。

説明2 様式論について説明します。…「知る」  
「君たちも指摘したように、作者や時代によって違うと言えますね。実は様式論というのがあるのです。作品は、一人一人の作者によって表現が違います。個人の特徴が出るのです。これを個人様式といいます。また、時代によっても違いが出てきます。個人個人が違っているように見えても大きく見れば、同じ時代のものは似てくるのです。流行などといえるかもしれませんが、これを時代様式というのです。他にも地域などの違いがありますが、ここでは同じイタリアなので、地域性はないということになります。このように、作品に見られる類似性を様式といいます。様式論と覚えておいてください。スタイルという言葉と同じです」。

また、「解説シート」（様式論、ミケランジェロとベルニーニの作風、ルネサンス時代とバロック時代の表現を解説した生徒用資料）では様式論について以下のように紹介した。

様式論について；制作には作者個人の特徴が出る。或る作家の複数の作品には個性の刻印が押されている限り、それらの作品には何らかの類似性・共通性が現れる。これを「個人様式」という。同様に、同じ時代に生きる複数の芸術家の間にもある種の類似性・共通性が認められる。個々の芸術家が創造を旨とし個性を発揮しているつもりであっても、彼らは同時代に生きる者である限り、時代性という共通の枠組みに何らかの拘束を受ける。これを「時代様式」という。こうした多様な様式の在り方を研究する方法論を「様式論」という。

説明3 2人の作者について、簡単に説明します。  
ミケランジェロとベルニーニの作風について、それぞれ、次のように紹介した。  
…「知る」

ミケランジェロについて；1475年（カプレーゼ生）～1564年（ローマ没）。初期には、古代彫刻の影響を受けて優美で理想主義的、かつ力強いが静か

な傾向の作品を制作したが、中期に入ると、人体のひねりを基本モチーフとする重厚で重々しい、緊張と苦渋に満ちた表現に転じていった。

ベルニーニについて；1598年（ナポリ生）～1680年（ローマ没）。同じく古代彫刻の影響から出発するが、写実的で軽快な特徴を持つ。細部描写は細かく「大理石をロウのように彫刻する」と形容される。運動と光の効果に関心を持ち、情緒的で感覚的で演劇的な身ぶりや場面を構成することを好んだ。

指示2 「作品シートA」の作品を分類してみましょう。ミケランジェロの作品と思うものに○をつけて下さい。○をつけないのがベルニーニの作品ということになります。そして、代表して誰かに黒板でやってもらいます。…「見る」「考える」

2人の作風について「作品シートA」と対応している「学習シート」（「作品シートA」に載っている諸作品が小さく掲載されている）で分類させ、代表者に黒板の掲示作品で実際に分類させた。

説明4 時代でも違います。彼らの2つの時代について説明します。…「知る」

指示3 「作品シートB」の作品を二つの時代（ルネサンス／バロック）に分類してみましょう。…「見る」「考える」

2作家の時代、ルネサンス時代とバロック時代の美術について、「解説シート」で説明した。「作品シートB」を配布し、「説明3」と同じように、「学習シート」で分類させて、代表者に黒板でも作品を分類させた。

「解説シート」では次のように紹介している。  
ルネサンス／バロックの彫刻表現の特徴について；  
正面性／奥行き、静的／動的、理想的／写実的、普遍的／現実的、単一視点／複数視点、比例の美／ダイナミズムの美、閉じられた形態／開かれた形態、均一の照明／明暗の対比

指示4 様式論というものを知った上で、それぞれの作品への自分の最終見解を書いてください。…「考える」

2作家の「ダヴィデ像」について、情報を知った上で個人の意見を「学習シート」に記入させた。次のような記述が見られた。以下、「学習シート」への記録を2作者対比の形で紹介する。

ミケランジェロの《ダヴィデ》／ベルニーニの《ダヴィデ》；①ルネサンスの特徴にあるように正面性、静的であり、重々しい感じである／バロックの特徴にあるように奥行き、動的であり、軽快な感じである。②力強く静かな作品／写実的で軽快な作品。③

ミケランジェロの作品は正面性だけの作品だったのでもう少し奥行きのある作品にしてほしかった。しかし、ミケランジェロは独特の作り方をしている、ルネサンス時代に合っている／ベルニーニの作品は動的で奥行き感があるのでとてもいい作品だなと思った。また、明暗もよく表され、個人の思いもよく伝わってきた。自分はこちらの方が好きだ。④理想的で力強い。そして人体のひねりがあり重々しい／写実的で軽快。そして情緒的で感覚的である。⑤単純で全然動きがない／とても複雑で、今にも動き出しそうである。⑥ずっしりしていて、表情が悲しげな様子でした。また、簡単に表現していると思います。このことから、ミケランジェロは悲しい静かな人だと感じました／華やかでとてもダイナミックに細かいところまでつくっていました。ベルニーニは激しく活発的な人だと感じました。⑦ミケランジェロの作品は好きではないけど、こういうさりげない感じがいいんじゃないかなあと感じました／動きがあり、すごい作品だと思いました。一番好きなのは明暗があるところです。僕もこういう作品をつくってみたいです。⑧ミケランジェロの作品は静かな感じがしてとても心が落ち着くと思います。理想主義的なので、夢があつていいと思います／ベルニーニの作品は動きがあり、演劇的な場面のため、とても楽しい気持ちになれると思います。⑨この作品にはあまり動きがなく明暗がはっきりしてなく奥

行きも感じ取られないが、頭、体、足の比例がよくとれていて、全体のバランスがとれている／この作品は動きがあり、比例よりもダイナミックに表されており、今にも動き出しそうな感じで、どこから見て捉えてもいいような感じがする。また、細部が細かく表されている。

指示5 発表して、みんなの意見を聞いてみましょう。…「考える」

学習シートを頼りに、自分の見解を発表させた。情報により、自分の考えは広がるが、他の意見を聞くことにより、さらに思考の広がりが増す。

結語 教師のまとめ

どちらの作品が良いとか、好きとかいうことが問題ではない。要は、情報を得た上での個人の結論であり、授業の初めと終わりでいかに自分が変わったかである。

授業後の感想から

授業終了後、生徒たちに本時の感想を書いてもらった。タイトルは「今日の授業についての感想」である。以下、紹介する。

A) 今まで絵や彫刻などを鑑賞する時はあまり深く考えず鑑賞していましたが、今日よく勉強して「時代」「作者」「場所」などで、作品の特徴が違うことを学び、これから美術鑑賞する時はその辺にも注意して鑑賞していきたいと思いました。

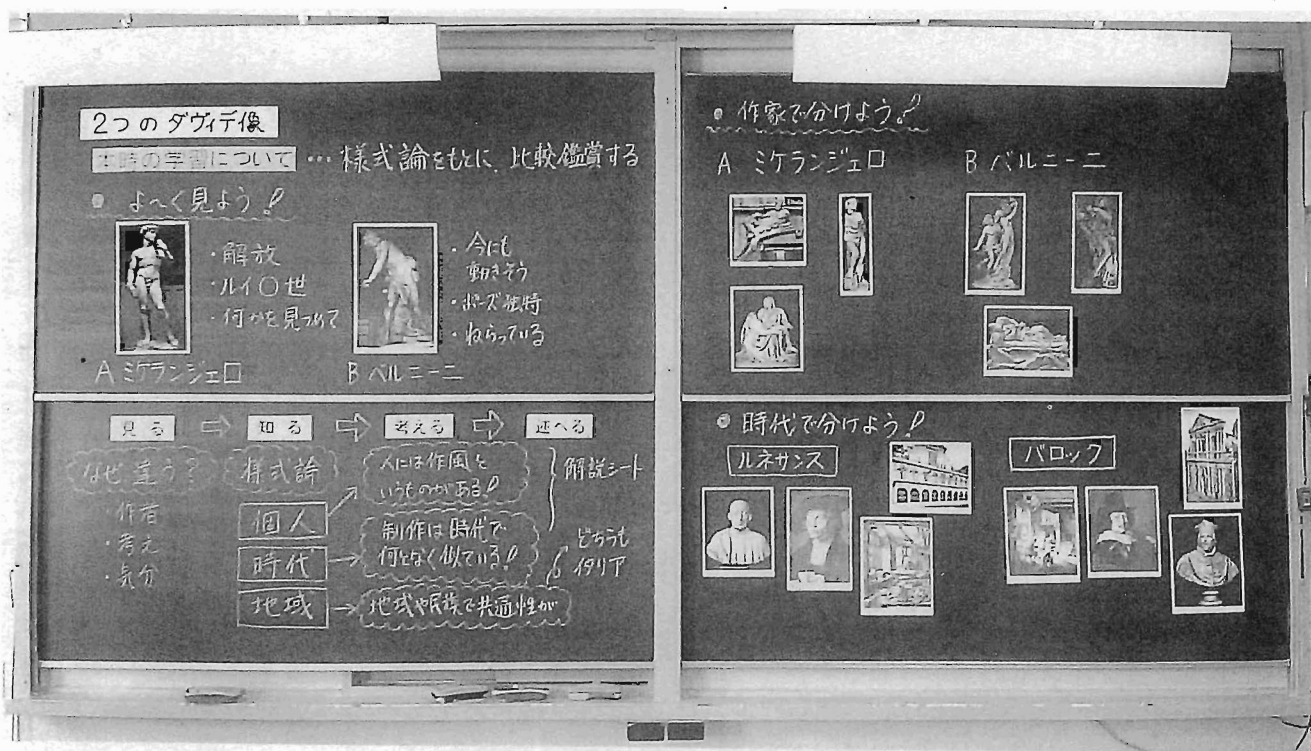


図4 黒板の様子

- B) 私は初めベルニーニの作品がいいと思っていました。動きがあるので自然だと思ったからです。そして、ルネサンスとバロックの違いを知って、初めは動きがあるという部分にしか注目しなかったけど、正面性など他のいろいろな部分がそれぞれ異なることが分かりました。ルネサンス、バロックの違いについて詳しく知った後も、ベルニーニの作品がやはりいいと思います。理由は動きがあって体のねじりが自然な感じでいいと思ったからです。今日の授業はおもしろい授業で詳しく分かりやすく知ることができて楽しかったです。
- C) 今まで『像』はすべて同じように思っていました。今日の授業を受けて作者や時代によっていろいろなものがあるんだなと思いました。私は見た瞬間から授業が終わるまでベルニーニの像の方が好きでした。こちらの像には立体感や動きもあったし、今にも動き始めようとするポーズをとっていました。ミケランジェロの作品は、静止している様子を感じました。そして、この像はどんな場面でどのようなことをしているのかがよくわかりません。これから何をしはじめるかもです。しかし、私がとらえたベルニーニ作の像は今にも動き出して、戦いだすような勇ましい感じがしました。私がこの作品にタイトルを付けるなら『勝ち誇る勇者』とつけます。
- D) 私はBのベルニーニの作品が好きです。初めの理由は像に動きがあっておもしろいと思っただけだったけれど、授業で様式論を学習してBの作品（バロック時代の作品）は動的で奥行きを表しており、何よりダイナミックに表現しているということが分かり、Bの作品がいいと思いました。ただ「見る」というだけでなく、そのことについて何かを「知る」ということをすれば、考えが変わったり、そのものをもっと好きになったりするということが分かってよかったです。
- E) 最初は行動がある方のBが好きだったけれど、後からは顔に優しさがあるAのミケランジェロの方が好きになりました。授業中にAとB、ルネサンスとバロックの見分ける部分があったけれど、私はその作業をするため、初めて細かいところまで作品を見たりどこがどう違うのかと比べたりしながら作品を見れてとても良かったです。
- F) 私は初めベルニーニの作品の方が好きでした。ミケランジェロの作品の方がリアルな感じでし

たが、ベルニーニの方には動きがあったからです。終わりににはさらにベルニーニが好きになりました。時代のせいかも知れませんがやさしさとなめらかさがあるような気がしたからです。美術館にあるような長く分かりにくい特徴より、短くつかみやすい授業でした。

### 3 考察

授業の実際で紹介した生徒の反応や意見から、以下のようにまとめる。

#### 「見る」段階におけるダヴィデ像の比較について

授業初めの感想では、テレビのCMなどの影響も見られ、ミケランジェロの作品には、解放というタイトルを付けてみたり、大胆だとか裸族などという表現をしてみたりと、軽い感じの感想が多かった。もう少ししつこい「見る」行為をとも反省したが、時間的に、また、写真での作品鑑賞ということでその限界は仕方ないと思える。ミケランジェロの感想で気持ちが悪いという表現をとっているのは女子生徒である。裸であることへの嫌悪感からのようである。

情報を与えない段階での「見る」行為において、生徒たちは思いのままの、軽い表現による感想を持つことが分かる。

ミケランジェロの作品から、ベルニーニの作品へと作品を1つずつ紹介したことについては、軽い感じの見る目から「比較する」という意味ある観察の方へと向かった感じを受けた。まず1つの作品を見せて、次いで比較作品を見せるという手法は適切であったと判断できる。

#### 「知る」段階における様式論をもとにした作品の分類について

知的情報を「解説シート」として配布したり、黒板の掲示作品を「作品シート」として個人に配布したりしたのは良かった。記憶は曖昧であり、手元に判別できる大きさで資料が存在すること、そして一人一人が所有していることは個人的思考での作品把握にはなくてはならないことであると感じた。また、個人様式や時代様式での分類は、生徒にはクイズとして受け取られたようで、感想にも楽しく比較して学ぶことができたとある。

さて、個人様式の分類分けにおける正答率は高く、生徒のほとんどが分類できるが、ミケランジェロのピエタに関してはベルニーニの「ロウのようにつくる」という知識から、その写実表現に悩んでいる生徒もいた。写実性については両者優劣付けがたい感想を持っているようである。また、時代様式で出てくる表現の違いのようなものを感じて分類して



いた感じを受けた。

時代様式の8つの作品分類に関しては約50%の正答率である。これら知識は重要であり、数値的には満足できないが、まず1年生の段階としては、このような時代的な表現の違い「様式」が存在すること自体をしっかりと押さえたい。

生徒たちは特に「正面性／奥行き」「静的／動的」「理想的／写實的」「比例の美／ダイナミズムの美」を理解したようであった。「光を生かした表現」などという生徒の言葉からもその理解度が分かる。

生徒たちは、個人様式、時代様式ということをも十分に理解したといえる。生徒の視野が広がり、作品を見る目が大きく開花したことは明確である。「知る」段階における知識が次の「考える」段階に大きく影響してくることになる。

「考える」段階における感想、最終判定について

最終的な判定での記入では、様式論で学んだ両時代様式の特徴を述べるものが多かった。はじめの感想に対して、理論的で真剣さの感じられる文章となっており、精神的にも初めと終わりの違いが明確に感じ取られる。また、初発の感想で「なぜこのような作品をつくったのだろう」という疑問にも、教師側からのテーマに関する知識を紹介することによって解決している。

芸術性の面から見れば、動的で写實的そして光の効果などを使用しているベルニーニの作品を好む生徒がほとんどであるが、ミケランジェロの静的で理想的な作品に対しても「落ち着いているところが好き」、「ミケランジェロはおとなしくて夢を持っているような性格ではなからうか」と好感を持った意見も多かった。生徒がいろんな面から作品をとらえようとしていることが分かる。

「見る」「知る」の段階を経て、「考える」段階に入る展開の良さが明らかなものとなった。生徒たちはある程度の知識を獲得したことで、十分に思考を働かせることができた。また、「見る」段階で感じた時間不足が、改めてより真剣に見直すという行為を生んだようである。「学習シート」の「最終判定」の欄の記述から見ても明らかであり、実際、生徒たちは授業の最後まで、生き生きとした活動を見せ、文章記述や意見発表に積極的な態度で終始した。

「見る」「知る」「考える」の3段階過程による学習が功を奏したといえる。

「考える力」は情報を与えることでより充実し、情報は、さらに新たな展開を示唆する。

「学習シート」の工夫について

「学習シート」も「見る」「知る」「考える」の段階に沿うよう工夫した。配布した時に内容が分からな

いようにという理由からタイトルや作者名、時代名を空欄にしておいたが、記入するという行為自体が思考の定着を図ることになるとも考えた。

また、個人様式、時代様式の分類分けについては、黒板の掲示物に対応するように「学習シート」にも該当作品をごく小さくではあるが判別できる程度の大きさのものを掲載した。代表者が黒板で分類することになるが、個人でも「学習シート」上で分類するという行為が図られた。

最終判定では改めて2作家の作品についての考えを記入することになるが、授業終了後には裏面に今回の授業の感想も書いてもらい、1時間での鑑賞授業の内容がしっかりと押さえられたと思う。

板書について

口答と、「学習シート」で授業の内容を押さえたが、さらに板書でも学習内容の理解定着を図った。板書を工夫することにより、授業終了時には、生徒たちにとって、本時の学習の概略がまるで大きな参考書の見開きまとめページのように教師の後方に見えるようにした。

課題

課題としては、資料がやや多くて煩雑になった感がある。生徒は机上にミケランジェロのダヴィデとベルニーニのダヴィデ、そして、「作品シート」に「解説シート」さらに「学習シート」が来ることになり、配布自体でも時間を取るようになる。解決できることではあるが、煩雑さは生徒の思考を混乱あるいは停滞させることになるので避けなければならない。

1時間取り扱いで実施したが、時間削減からも時間をかける余裕はない。1つの題材を長く扱うよりも、短時間題材で多くの経験や知識を獲得させることが、鑑賞教育にとっても効果あることと思う。1時間の中でいかに授業を組み立てるか、教師は時にプロデューサーでなければならない。

#### 4 おわりに

本鑑賞学実践研究10は、熊本大学教育学部教員と同附属中学校教員との第一回目の共同研究の産物である。義務教育段階の学校教育を飛躍的に充実させるためには、豊富な理論的方法論的知識を有する大学教員と実践経験・授業パフォーマンスに長けた現場教員との共同作業が必要である。両者がそれぞれの長所を出し合うことによって、質の高い教材開発が可能となるに違いない。大学教員と現場教員の共同研究については、拙論『美術鑑賞教育における実践的共同研究について』（注2）を参照していただきたいが、本鑑賞学実践研究10では、熟練の授業者

と反応の良い生徒たちに恵まれて、実践授業は予想以上の成功を収めたと言えるだろう。あえて食通の比喻を使わせてもらえば、食材とレシピは大学教員が調達するが、料理するのは現場教員であり、味を見るのは生徒たちである。これら三つの要素のどれが不十分であっても、良質な料理は成立しないのである。

本授業実践において、特徴的であったのは、「様式論」の知見を導入したことである。中学校の鑑賞授業実践においては、雑多な知識をむやみに提供するよりも、作品に対する様々なアプローチ、様々な視点、様々な態度を理論化したもの、すなわち作品解釈に関する方法論についての知識を与えることのほうが効果的である場合が多い。生徒は多数の「眼」を獲得することによって、同じ作品に対しても多様な視点からこれを見ることができるようになり、そのことによって美術に対する関心はさらに高まることであろう。

本実践研究では、「様式論」について簡潔に理解してもらうために、「鑑賞課題作品」の他に、「作品シートA」「作品シートB」「解説シート」を用意した。このうち、「作品シートA」は、ミケランジェロの3作品（《ピエタ》《夕》《反抗する奴隷》）とベルニーニの3作品（《アポロンとダフネ》《天使》《福者ルドヴィーカ・アルベルトーニ》）をランダムに配列したものであり、個人様式の相違を「眼によって」把握してもらうためのものである。「作品シートB」は、室内画（デューラー作《書斎の聖ヒエロニムス》）とオスターデ作《画家のアトリエ》、肖像画（デューラー作《若い男の肖像》）とハルス作《男の肖像》、肖像彫刻（ベネデット・ダ・マイアーノ作《ピエトロ・メリーニの肖像》）とベルニー

ニ作《ボルゲーゼ枢機卿》、建築ファサード（《サンティ・アポストリ聖堂》と《サン・タンドレア・デラ・ヴァッレ聖堂》）をそれぞれ一組にして提示したもので、これは、時代様式について、単に「解説シート」の文字だけからではなく、「眼を通して」理解してもらうための小道具である。「作品シートB」の諸作品は、様式論の第一人者であり確立者であるハインリヒ・ヴェルフリンに敬意を表して、彼の主著『美術史の基礎概念』（注3）から引用したものである。

## 注

- 1) 吉川 登, 野上雅志, 鑑賞学実践研究3—俵屋宗達作「風神雷神図屏風」—, 熊本大学教育学部紀要, 第51号, 人文科学編, 2002年, 132頁.
- 2) 吉川 登, 美術鑑賞教育における実践的共同研究について, 熊本大学教育実践研究, 第21号, 2004年, 165~169頁.
- 3) H. Wölfflin, Kunstgeschichtliche Grundbegriffe, Basel, 1970.

## 参考文献

- 吉川 登, 行為としての鑑賞—鑑賞学の序章としての鑑賞行為の分析—, 大学美術教育学会誌, 第25号, 1993年.
- 吉川 登, 鑑賞学に関する指導事例, 「教員養成系大学・学部における美術教育の課題と展望」, 日本教育大学協会全国美術部門新教育課程検討特別委員会, 1997年, 39~40頁.
- H. Wölfflin, Kunstgeschichtliche Grundbegriffe, Basel, 1970. 邦訳: 海津忠雄訳, 美術史の基礎概念, 慶応義塾大学出版会, 2001年.
- R. Wittkower, Bernini, Oxford, 1981.
- L. Goldscheider, Michelangelo, London, 1975.
- U. Baldini & L. Perugi, Michelangelo Die Skulpturen, Stuttgart, 1982.